

諸井勝之助先生を偲ぶ —「原価計算基準」を考える会のこと—

尾畑 裕

1 はじめに

諸井勝之助先生が本年1月5日になくなられたというお知らせをいただき、たいへん残念でならない。ここに心より哀悼の意を表する次第である。わたくしと諸井先生との接点は、『原価計算基準』を考える会」という研究会であったので、ここでは、その研究会をめぐる思い出を書き記し、諸井先生を偲びたいと思う。

わたくしがはじめて諸井先生とお会いしたのは、2013年の暮れ12月25日のことであった。LEC 会計大学院の山本宣明先生からご連絡をいただき、「原価計算基準」について、諸井先生と私とでお話する機会をセッティングしたいということであった。たいへん貴重な機会をいただいたと感謝している。東大経済学部の名誉教授室にて、諸井先生、当時 LEC 会計大学院の教授であった林總先生、山本宣明先生と私でお話しをさせていただいた。そのさい、わたくしが久留米大学における日本会計研究学会の大会で、「原価計算基準」について統一論題の座長をつとめ、座長として執筆した原稿「原価計算基準から原価・収益計算基準へ」の抜き刷をお渡しした。「原価計算基準」が歴史的に大きな役割を果たしたことを認めつつも、現在、「原価計算基準」は、多くのテキストの基礎となっているという現実があり、杓子定規な解釈が固定化される原因にもなっているのではないかということをも

し上げたと思う。「原価計算基準」の杓子定規な解釈が固定されるという問題に関しては、諸井先生も何かしなければならぬと感じられたようであった。

2 「『原価計算基準』を考える会」の活動開始

諸井先生との会談のあとしばらくして、「原価計算基準」に関する研究会を定期的に開催したいむねのお話しをいただいた。2014年の3月31日に、研究会についての打ち合わせをもち、研究会についての方向性を固めた。「原価計算基準」の前文のなかには、「その原価計算手続を規定するに当たっては、この基準が弾力性をもつものであることの理解のもとに、この基準にのっとり、業種、経営規模その他当該企業の個々の条件に応じて、実情に即するように適用されるべきもの」と書かれているにもかかわらず、このことが正しく理解されていない。そのため、「原価計算基準」を改定するというよりは、その正しい理解を普及することが重要であるということを確認した。

研究会は、『原価計算基準』を考える会」という名称になり、2014年4月15日より本格的な活動を開始した。そのメンバーは、諸井勝之助先生、高橋史安先生、清水孝先生、本間正人氏、林總先生、篠宮雅明先生、山本宣明先生、そして尾畑であった。

研究会では、毎回、諸井先生から、「原価計算基準仮案」、そして「原価計算基準」の策定過程における興味深い裏話を聞かせていただいた。そもそも、「原価計算基準仮案」、そして「原価計算基準」の実質的な策定が、中西寅雄先生、鍋島達先生、諸井勝之助先生の3先生により進められたことも、諸井先生のお話を聞くまではまったく知らないことであった。「原価計算基準仮案」の策定作業のころ、中西寅雄先生は大阪大学の経済学部長であった。諸井先生と鍋島先生は、夜行列車で2泊3日で大阪にいき猛勉強されたことがあったそうである。その帰り、中西先生から日本酒と鯛の寿司を1つずつ、夜食にいただいたという話はとくに印象に残ったエピソードである。

3 諸井勝之助先生の「原価計算基準」への思い

諸井先生は、中西寅雄先生と鍋島達先生とともに、「原価計算基準」の誕生に大きく関わってこられた。研究会において、諸井先生は、中西寅雄先生の思い出、裏話をたくさん披露していただいた。諸井先生がよくおっしゃられていたのは、「原価計算基準」は中西寅雄著であるということである。その意味は、「原価計算基準」は、中西寅雄著の論文であり、その中には中西先生の思い、中西先生ならではの考え方がたくさん込められているということである。

「原価計算基準」は、企業会計審議会の中間報告としてだされたものであり、一見しただけでは、中西寅雄先生でなければこういう形にはならなかったという点に思い至らない。諸井先生からお話を伺ってわかってきたのは、今の「原価計算基準」が今のよう形に

なったのは、経営学者としての中西寅雄先生の個性によるものであるということである。まったくの無の状態から今の「原価計算基準」を作ったとしたならば、中西寅雄先生でなければ、けっして今のよう形にはなっていなかったであろう。われわれは、すでに完成された「原価計算基準」の姿をみて、それに慣れてしまっているため、そこに中西寅雄先生ならではの思考が反映されていることに気が付きにくいのではないかと思う。諸井先生のお話を伺って、はじめてそのことに気づかされた次第である。

「原価計算基準」が公表されて、50年以上たつのに一度も改定されていないことがしばしば批判される。「原価計算基準」が公表された当時と、現在では、会計制度も大きくかわっているし、環境も大きくかわっている。そのため、いまの環境にあわせて必要な改訂をおこなうべきという意見がでてくるのは不思議ではない。

「原価計算基準」が標準原価計算の普及に大きな役割をはたしたことは周知のことである。そして、ある先進的な原価計算手法があったとして、それを普及するのに、「原価計算基準」のなかに組み入れるのが非常に効果的であると多くのひとが考えるようになった。そのため、これも、あれも「原価計算基準」に入れるべきという意見がでてくることになる。しかしながら、そもそも、「原価計算基準」に組み入れることにより実務への普及をもくろむという発想自体、中西先生の工夫であったといえる。あくまで、「原価計算基準」は会計の基準であり、表立って啓蒙的なことはいれられないという制約のなかで原価計算制度という考え方を巧みに導入することにより、企業にとって役立つ仕組みを普及しようとした。そのような形を作るのに中西先生は非常に苦勞された。そのことを諸井先生からの話

を聞く中で気づかされたことである。

諸井先生は、たしかに安易に「原価計算基準」を改定することには反対であった。それは、「原価計算基準」が今のような形で成立するにあたっての中西先生のご苦勞を目の当たりにしたからであり、そこに込められた中西寅雄先生の思いを知るからである。

4 「『原価計算基準』を考える会提案書」

「『原価計算基準』を考える会」では、当初より、その成果を提案書としてまとめることが合意されていた。そして、メンバーで分担して、提案書の起草を行うことになった。提案書が目指したのは、「原価計算基準」成立当初と現代とで環境が大きく変化したことを踏まえ、「原価計算基準」にどのような問題が生じてきているかを検討するとともに、「原価計算基準」に対する誤解をとくことにあった。

「原価計算基準」に対する批判の多くが、「原価計算基準」を必要以上に拘束的に解釈しようとしていることに起因するという考えのもと、「原価計算基準」成立の経緯を振り返ることにより、その本来の趣旨を明らかにしようとしたのである。そして「原価計算基準」成立の経緯を正しく語れるのは諸井先生しかおられなかった。

5 日本原価計算研究学会第 40 回全国大会における統一論題

2015 年 9 月に、日本大学商学部において、

日本原価計算研究学会第 40 回大会が開催されることになり、その統一論題のテーマが、「『原価計算基準』の今後めざすべき方向性」となった。尾畑が座長で、「原価計算基準を考える会」のメンバーを代表して、高橋史安先生、メンバー以外から、片岡洋人先生と、稲垣靖氏が報告者となり、そのメンバーで討論を行った。その会場の席上、参考資料として、「『原価計算基準』を考える会提案書」が配付された。そのテーマに合わせ、諸井勝之助先生に、「『原価計算基準』制定過程を顧みて」というタイトルで記念講演をしていただき、非常に好評を博したのであった。

6 「原価計算基準を考える会」の書籍

「『原価計算基準』を考える会」での研究成果をまとめた書籍が企業会計の別冊として計画された。本来ならばとっくに出版されていなければならない書籍であるが、それがいまだに出版されていないのは、ひとえにわたくしの責任である。諸井先生はこの本の出版をたいへん楽しみにされていた。諸井先生の生前に出版できなかったことを本当に申し訳なく思う。諸井先生の訃報に接したときに真っ先に感じたのは、本当に申し訳ないことをしてしまったという後悔である。書籍には、諸井先生ご自身の原稿、「原価計算基準を考える会」メンバーの原稿、メンバー以外のかたからのゲスト寄稿のほか、諸井先生との対談記録、諸井先生秘蔵の数多くの資料が掲載されることになっている。一刻も早く書籍の刊行を実現して、諸井先生にご報告したい。